

三宅島大学 開校から卒業式まで



2013年
(平成25年)
11月18日
月曜日
あしたばん編集部
発行所: 加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/
第四十四号

卒業式

三宅島大学が開校して以来、島内では数多くの授業が開かれてきた。あれから三年。三宅島大学にとって初の卒業生が誕生した。式は十七日、阿古船客待合所「ここぼーと」にて執り行なわれた。卒業生は、「ころっちゃん」と親しまれている田中耕介さん。この卒業式を行うにあたり、欠かせない人物にお話を伺った。三宅島大学マネージャーの吉田武司さんと上地里佳さんだ。この二人による絶妙な連携により、卒業式が成功したと言っても過言ではない。運営面でのサポートをした吉田さんは「ころっちゃんの作品をたくさんの人に見てもらいたい。だから島の玄関口であるここでやりたかった」。田中さんの相談役であった上地さんは「作品への愛着が持て、やりたいと思っていることができるよう最大限サポートしたかった」と話していた。二人は田中さんをよく理解しようとし、モチベーションを保つ工夫をされてきた。彼への想いは大変強いもので、今回の卒業に対し本当に嬉しいと感じておられる。お話を伺う中で、三宅島大学で共に歩んできた彼らの時間は尊さを感じる素敵な卒業式へと繋がっている。

式は九時から厳かに始まった。まずは卒業証書授与。メンターの加藤文俊教授をはじめ、多くの大学関係者が見守る中、卒業証書を受け取る田中さん

の姿は少し寂しそうに見えた。その後副村長である内田峰夫さんからの式辞、そして卒業生答辞へと続いた。答辞を述べている田中さんは凛とした姿で、すらすらと想いを語っていた。大学時代につけていたロゴを見ながらの答辞であったため、話が進むにつれ自分の中で伝えたいことが増していき、より熱く語っていたのではないかと。普通の大学とは違う。机に向かう勉強だけではない、それ以上の魅力が三宅島大学にはある。これからも三宅島大学が繁栄されることを願っています。こうした彼の言葉で式は終わりました。

次に卒業制作成果発表が行われた。卒業制作タイトルは、「虹アルパム」。人との関わりやコミュニケーションが大好きな彼は、「皆さんで完成させたい」と話しており、現在も写真を募集している。続いて、慶應義塾大学加藤文俊研究室の学生による三宅島を対象とした研究の発表が行われた。夏に行われたキッズリサーチ、慶應の卒業プロジェクトとして行っている研究二つと、上地さんが在学中に取り組んだ修士論文の報告が行われた。これらの研究によって、彼らと三宅島との繋がりが深くなっていることを改めて感じた。最後は慶應義塾大学加藤教授と東京文化発信プロジェクトの森司さんによる、三宅島大学の振り返りが行われた。

これからどのように発展していくのか楽しみである。田中さんに続く卒業生の誕生を期待したい。

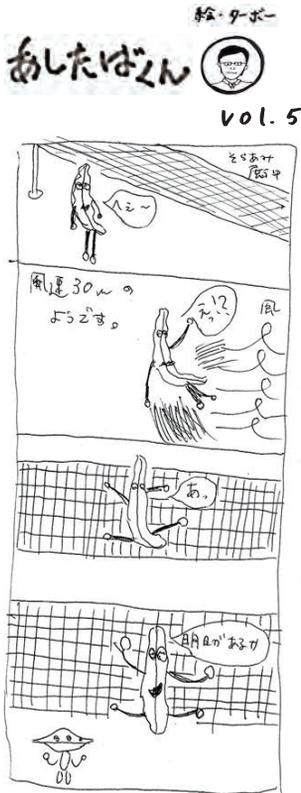
(細井美香)

この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

三宅島大学初の卒業生 田中耕介さん

卒業式会場でひときわ目立つ虹。三宅島大学初の卒業生、田中耕介さんの卒業制作「虹アルバム」は、大きなパネルを五枚並べて作った白いキャンバスに五色の写真を貼って作った虹のモザイクアートだ。海や夕焼けの空、植物など、三宅島に関するものを写した赤・緑・オレンジ・青・黄色の写真が並ぶ。使った写真は撮った人も場所も年代もバラバラ。近くで見るとその写真に対する持ち主の思い出が虹の周りに書かれていたり一つ一つに色々な想いが詰まっていることが伺える。

「どんなポスターにしたい？」取材の帰り道で話し合いが始まる。今回私たちがお話を聞かせていただいたのは、三宅島観光協会の磯谷泰斗さん。とても気さくな方で、気づいたら一時間半も話し続けていた。磯谷さんに限らず、取材にに応じてくれる方たちは初対面である私たちのために時間を割いて多くの話をしてくれる。そして笑顔でお別れをする。会えてよかった、そう思う。そのひとの心を、見るひとの心を揺さぶりたい。だから私たちはポスターを作りたいと思うのだ。



「普通で暮らしていたら坪田の言葉などただおじいさんおばあさんが話している言葉に過ぎない。しかし、三宅島出身ではない外部の人がそこに面白さを見出したことよって価値が生まれた。受講して、ますます坪田が好きになりました」。

「普通で暮らしていたら坪田の言葉などただおじいさんおばあさんが話している言葉に過ぎない。しかし、三宅島出身ではない外部の人がそこに面白さを見出したことよって価値が生まれた。受講して、ますます坪田が好きになりました」。

また行きます

(堀越千晴)

「どんなポスターにしたい？」取材の帰り道で話し合いが始まる。今回私たちがお話を聞かせていただいたのは、三宅島観光協会の磯谷泰斗さん。とても気さくな方で、気づいたら一時間半も話し続けていた。磯谷さんに限らず、取材にに応じてくれる方たちは初対面である私たちのために時間を割いて多くの話をしてくれる。そして笑顔でお別れをする。会えてよかった、そう思う。そのひとの心を、見るひとの心を揺さぶりたい。だから私たちはポスターを作りたいと思うのだ。そのひとの魅力や、そのひとが伝えたいことを『そのまま』ポスターという形にする。この、『そのまま』が難しい。悩んで悩んで、言葉を選ぶ。夜通し意見をぶつけ合って、二枚のポスターが出来た。届けにいくとき、緊張と不安が心を

支配する。自分の手から磯谷さんの手にポスターが渡ったら、自分のポスターを眺める磯谷さんの表情を、じっと見る。照れた表情が変わっていく。「あ、このポスターの表情だ」。

磯谷さんは照れながらも「飾っておくよ」と言ってくれた。ポスターは目に見える形として残り続ける。見るたびに何かを考えたり、何かに気づくきっかけになったり、ほんの少しでも人の心に刺激を与えられたら……そんな願いが込められている。そして、見るたびに私たちのことも思い出してほしいな、なんてわがままな感情も芽生えてしまうのだ。

午後二時二〇分。船の上から港を見下ろすと、磯谷さんの姿が見えた。取材をしたときは船を見送ることはしていなかったのに。テープを投げる。「また来てね」。

(小竿まゆる)



夏の思い出



今夏、三宅島大学主催のキッズリサーチが行われたことを覚えているだろうか。今年で二年目のこの企画。午前中は三宅小学校や三宅中学校で子どもたちの夏休みの宿題に取り組み、午後は御蔵島会館を拠点に日替わりのワークショップが開催された。あれから三ヶ月。私たちは、ひと夏の記録を冊子とDVDのセットにまとめた。冊子には各日程の概要が子どもたちの写真や作品とともに掲載されており、DVDには子どもたちがワークショップで制作したCMや七日間のまとめが盛り込まれている。私たちは、完成品が子どもたちの手に渡るこの時を楽しみにしていた。

十一月十七日、参加者だった三兄弟に会うために、私は錆が浜港に駆けつけた。出港を待つ人や見送りの人で賑わう待合室の中で小さな彼らの姿を探し、三ヶ月振りに会う彼らの背は少し伸びていて、雰囲気もどこか大人びたように見えた。しかし、成果物を見せた時の笑顔は相変わらずあどけなく、冊子やDVDを興味津々に見つめては小さな歓声をあげていた。会えたのは、たった十分程度ではあったが、彼らのパワーがぎゅっしり詰まった時間だった。すぐにまた会えるわけではないが、彼らの成長をどこかで見ていたい、そんな気分になった。次に会う時には、どれくらい大きくなっているのかとても楽しみだ。

(枅野友香)